Mon Nara

Numéro284 Association Franco-Japonaise de Nara 奈良日仏協会 NOV－DEC 2017 11－12 月合併号

ワインを題材に楽しい勉強会（?）を開催

第 137 回フランス・アラカルト特別篇ワインパーティ（12/7）

今回のフランス・アラカルトは、昨年当協会に入会した新人役員（髙松、杉谷）が企画を担当。二人とも少しワインに携わる仕事をしていたこともあり、ワインをテーマに「特別篇ワインパーティ」と題し、通常とは異なる形で実施しました。3 部に分かれ、第 1 部は、赤白 3 種類ずつのワインの目隠しテスト、第 2 部はワインに関するクイズでの勝ち抜き戦、第 3 部はワインの思い出を語るコーナーと、盛り沢山の内容。

ワインクイズはフランスワインにのみ絞った問題で、読みあげた文章が正しいか間違っているかを○×札を挙げて答える形式で、「ヴァレリーの詩『失われた美酒』で歌われているワインは白ワインである」、「メドックではワインを飲みながら走るマラソンがある」など、あちこちのワイン本やネットから引っ張り出した珍妙な質問に、全員頭を抱え、試験を受けているようだとの声も。

ワインを語るコーナーでは、「思い出の一本」など、メンバーの皆さんのワインに関する体験談をお話ししていただきました。ワインを飲むことが多くても、銘柄やまして品種など気に留めてなかったという方が多かったですが、給費留学生試験の合格発表を婚約前だった現在の奥さんと一緒に見に行き、今の値段で 1 万円もするボルドーワインを丸善で買って、兄さん夫婦宅で祝ってもらった話、留学先のクレルモン＝フェラン大学の口頭諮問を終えほっとして、お酒を飲めないので半分以上捨てることになるのを覚悟の上、ロワール・ワインのシノンの赤を買って、ホテルで毎晩 1 センチずつ飲んだ話など、胸の奥にぽっと灯がともって温かくなるような若かりし日の思い出話もありました。

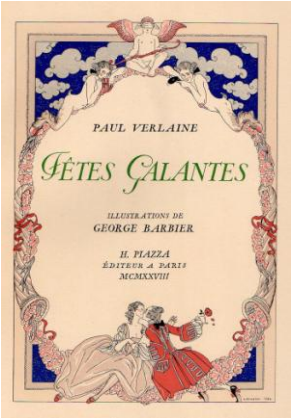
会場の「喫茶パル」では、ご主人が写真家の腕を振るって撮影したモン・サン＝ミシェルの写真が壁に飾られ、奥様が長年研鑽されたケーク・サレやクレープが振舞われるなど、会を盛り上げていただき、16 名と少人数でしたが、12 月にふさわしい忘年会のように和気あいあいとした楽しい勉強会（?）となりました。（杉谷健治）

第 1 部はブラインドテストで、6 つのプラスチックカップに入ったワインをテイスティングし、各々のぶどうの品種を当てるという催しをしました。フランスワインと言えば、王道を行く二大名産地のボルドーとブルゴーニュは外せません。ボルドーのソーヴィニヨン・ブラン、カベルネ・ソーヴィニヨン、ブルゴーニュのシャルドネ、ピノ・ノワール、そして、アルザスのリースリングと、コート・デュ・ローヌの赤、シラーを選びました。会が始まってのいきなりのテストで、「普段は何の品種かなんて考えて飲んでないから…」などというお声も聞かれる中、答え合わせの時間が来ました。残念ながら、全問正解はいらっしゃいませんでしたが、お二人が 4 問正解で優勝、3 問正解がお一人、2 問、1 問の正解が数名と続きました。さすが奈良日仏協会の皆様です。ソムリエが悩む出題を見事解かれました。今回のワイン選びでアドヴァイスいただきました当協会法人会員サン・ヴァンサンの竹中さまにも、ワインパーティが大盛況に終わりましたことを感謝申し上げます。（髙松洋子）

フランス文学の庭から 〈54〉

名句の花束

三 野 博 司（会長）



De la musique avant toute chose
まず何よりも音楽を
（ヴェルレーヌ「詩法」1884 年）

フランス歌曲（Mélodie）にもっとも多くの詩を提供したのは、なんといってもヴェルレーヌでしょう。同じ詩に複数の音楽家が作曲している例も多く、今回とりあげる「月の光」もフォーレとドビュッシーがともに作曲しています。ヴェルレーヌの詩と音楽との近縁を示す詩句としてよく知られているのは、1884 年に刊行された詩集『昔と近ごろ』に収められた「Art poétique 詩法」の冒頭にある「De la musique avant toute chose まず何よりも音楽を」という宣言です。そのあとは、こう続きます。

「Et pour cela préfère l'Impair / Plus vague et plus soluble dans l'air, / Sans rien en lui qui pèse ou qui pose. そのために奇数脚を好め / いっそう漠として大気に溶け込み / 何ものもとどこおることのない奇数脚を」

奇数脚とは一行の音節の数が奇数である詩句であり、そのため音楽的な律動を得て、感情の細やかな綾を表現することが可能になると言われています。

ポール・ヴェルレーヌ（Paul Verlaine, l844-96）は、フランス東部の町、メッスに生まれました。生家は、20 年ほど前に訪れたときにはその表示があるだけでしたが、現在は記念館として公開されているようです。

1865 年、父の死の年に、最初の詩集『土星びとの歌（サチュルニヤン詩集）』を発表します。そのなかに収められた「秋の歌 Chanson d'automne」は、上田敏の訳によって知られています（1905 年、訳詩集『海潮音』）。幾人かの作曲家によって歌曲になっていますが、むしろレオ・フェレやブラッサンスのシャンソンのほうが親しまれています。原詩の内容からいっても、シャンソンのほうが似合いそうです。ボードレールにも「秋の歌」と訳されている詩があり、若き日のフォーレが作曲していますが、原題は Chant d'automne です。Chant は荘重な歌曲を指すことが多いのに対して、Chanson のほうは通俗的な歌すべてを指します。同じ「秋の歌」でも、ボードレールの死を連想させる暗さに対して、ヴェルレーヌのほうは憂愁の情趣にたっぷりひたっているという感じです。

Watteau, La leçon d'amour, 1716 - 1717 年

1867 年、ヴェルレーヌの初恋の人エリザが亡くなり、２年後に発表されたのが、この従姉への秘めた愛を歌った典雅な詩集『雅なる宴 La Fête galante』です。18 世紀ロココ時代のフランスの画家ワトー（Antoine Watteau 1684-1721）の描いた典型として、「雅なる宴」の絵と呼ばれる一連の作品があります。田園や庭園に集った複数の男女が愛を語り合う、その様子を描いたものであり、ヴェルレーヌはこのワトー的な世界を歌いあげようとしました。

1887 年、フォーレはヴェルレーヌを発見し、詩集『雅なる宴』の冒頭に置かれた「月の光」に曲を付けました。共通の美意識をもった二人の芸術家の幸福な出会いです。「月の光」はそれまでの歌曲の概念を変える最初の曲のひとつで、ピアノと声がそれぞれ独立しています。前奏でピアノがメヌエットを奏でます。メヌエットは古い舞曲で、ゆるやかな３拍子。1 拍目にアクセントが置かれ、優雅に踊られる宮廷舞曲です。やや安定感を欠いたピアノの音が、どこかはかなげでもの憂く、かつ典雅な気分をみごとに表現しています。それはまさに月の光の下で繰り広げられるかつての「雅なる宴」を幻想的にイメージさせてくれます。一度聴いたら忘れられないメヌエットですが、そこへ声がそっと加わります。とはいえ、ピアノは平然として演奏し続け、声も独自に歌います。それぞれが独立しながらも、二つのパートが緊密に融和しているという不思議な印象を与えます。ボードレールの詩に作曲された「秋の歌」は、フォーレの初期作品であり、ロマン主義的な雰囲気が残っていて、他の作曲家たちの影響も感じられます。「月の光」に至って、フォーレは、他の追随を許さない独自の世界を完成したといえるでしょう。

ヴェルサイユ在住 大石良太画伯 Chevalier 受賞祝賀会

これまで奈良日仏協会とも縁のあったヴェルサイユ在住の大石良太画伯が、このたびフランス政府より勲章 « Chevalier de l'ordre des Arts et des Lettres » を授与され、それをお祝いする昼食会が 10 月 13 日（金）、登大路ホテルにおいて開催されました。主催は、大石画伯と長年の交流がある国際ソロプチミスト奈良です。会員 13 人が出席して大石ご夫妻を囲む会に、奈良日仏協会会長の三野もご招待いただきました。画伯からはヴェルサイユ在住 33 年間のたいへん興味深いお話をうかがうことができました。叙勲式典は、11 月 8 日（水）ヴェルサイユ市庁舎にて行われたとのことです。大石画伯のますますのご活躍をお祈りするとともに、国際ソロプチミスト奈良の皆様にも感謝申し上げます。（三野博司）

大石良太『ボーヴォワール遠望』2016 年

在京都フランス総領事主催夕食会

2017 年 11 月 20 日、在京都フランス総領事主催による夕食会が、京都先斗町にあるレストラン「禊川」において開催されました。昨年秋に着任されたジャン・マチュー・ボネル総領事による夕食会は、今年 3 月 21 日の「グード・フランス Goût de / Good France」に続き 2 回目です。今回招待を受けたのは、福井、京都、奈良、神戸、鳥取、島根の各日仏協会会長の 6 名でした。総領事は、来年 2018 年は日仏友好 160 周年にあたり、これを祝う各地の日仏協会の催しには日程調整が可能な限り出向きたいとの意向を述べられました。前回夕食会の時とは半数のメンバーが交代しており、今回新たに知己を得た地域の日仏協会の活動について貴重な情報を得ることができました。（三野博司）

フランス語で読む日本文学：川端康成『古都』(1962)より

1968 年の川端康成のノーベル文学賞受賞理由に、「日本人の心の精髄をすぐれた感受性で表現し世界の人々に深い感銘を与えた」ことがあり、『古都』（仏語題 *Kyôto*）も受賞対象作品の一つでした。京都を舞台に、伝統を継ぎながら新しい時代を生きて行こうとする双子の姉妹の物語です。背景に京都の伝統林業「北山杉」のことが描かれ、小説に味わいを添えています。町の呉服問屋に育てられた千重子は、祇園祭の夜、北山杉を生産する村の娘苗子と出会い、それがきっかけとなって自らの出生の秘密を知るに至ります。最終章で千重子は苗子に会うために、京都の町から北山杉の村にやって来ます。植林された杉の木の枝打ちされた上方の丸い葉が、千重子には「青い地味な冬の花」のように見え、あらためて杉の美しさに気づきます。（浅井直子）

« Sur les pentes du Kitayama, les cryptomères avaient été élagués jusqu'au sommet. Les quelques feuilles qui restaient à la cime des arbres, modestes et vertes, apparurent à Chieko telles les fleurs de l'hiver. »

「北山杉は、じつにこずえの方まで、枝打ちしてあって、千重子には、木末に少し、丸く残した葉が、青い地味な冬の花と見えた。」

« Les quelques feuilles laissées en couronne à la cime de ces arbres si droits lui faisaient songer aux « fleurs de l'hiver ». Ce sont vraiment des fleurs de l'hiver. Dans la plupart des maisons, en bas comme au premier étage, on avait aligné des trones écorcés et lavés : ils séchaient. On avait dressé les troncs blancs après avoir méticuleusement mis leur base sur le même rang. Même ainsi, ils étaient plus beaux que n'importe quel mur. Beaux, ils l'étaient encore dans la montagne, l'herbe flétrie frangeant le pied des troncs, droits et d'égale grosseur. À peine une touche dans l'intervalle entre les troncs, apparaissait le ciel. « C'est encore plus beau l'hiver, non ? remarqua Chieko (...) » (*Kyôto*, traduit par Philippe Pons, Éditions Albin Michel, 1971, pp.177-178.)

「じつに真直ぐな木末に、少し丸く残した杉葉を、千重子は、「冬の花」と思うと、ほんとうに冬の花である。たいていの家は、軒端と二階とに、皮をむき、洗いみがきあげた、杉丸太を、一列にならべて、ほしている。その白い丸太を、きちょうめんに、根もとをととのえて、ならべ立てている。それだけでも、美しい。どのような壁よりも、美しいかもしれない。杉山も、根もと下草が枯れて、真直ぐな、そして、太さのそろった幹は、美しい。少しまだらな幹にあいだからは、空がのぞけるところもある。「冬の方が、きれいやないの。」と、千重子は言った。」

東山魁夷「冬の花」(1962)：川端康成の文化勲章受章を記念して川端氏に寄贈

2017 年度 ガイドクラブ「大神神社散策」と「利き酒体験」（10/14）報告

午後 2 時ピエール・レニエ先生はじめ 14 人が JR 桜井線三輪駅に集合し、奈良県庁で国際交流員として勤務するジャンヌ・オーストリーさん、追手前大学前学長柏木隆雄さん・加代子さんご夫妻も参加されました。

神社に向かう途中の店先の合せ柿が大和の色そのままです。線路を渡って二の鳥居前に到着。ここから参道ですが、今回は北に折れるルートへ。はじめに展望台に向かいました。御神体である三輪山の姿を仰ぎ、西に奈良盆地、国道沿いの大鳥居、大和三山そして遠くには二上山が望めます。続いて摂社を二つ訪ねました。狭井神社には「薬井戸」があり万病に効くご神水を飲むことができます。近くに三輪山登拝口があり、許可をとって山に入ることができますが、草木や石も採取してはならず写真撮影も禁止。夏には素足で登る人も多いそうです。活日神社は杜氏の祖神を祀り 11 月の醸造祈願祭では、全国から集まる酒造関係者がお参りをします。

途中の鎮女池畔の「清明」の文字は三島由紀夫によるもので、小説『奔馬』には大神神社の描写があります。こうした知識や和仏用語は、9 月 16 日の勉強会でレニエ先生に教えていただき、予備知識と照らしながら歩くことができました。そして「巳の神杉」が屹立する拝殿前へ。三輪山が御神体なので本殿はないのです。拝殿に上がり正面に架かる「大杉玉」の横で大神神社の説明を受けました。「やまと」とは「やまのふもと」つまりまさに大神神社がある場所が「大和」だったという話が印象的でした。側廊の突当りからは山との境界になる神聖な「三ツ鳥居」を見ることができました。

散策のもう一つの楽しみが三輪の酒です。創業 350 年の「今西酒造」を訪問し蔵内の円卓を囲んでブランド「三諸杉」の利き酒大会となりました。三諸とは三輪山の古くからの呼び名だそうです。懇親会は駅に近い「栄寿司」で。柏木先生が大いに盛り上げて下さり途中から日本語禁止。大時計の掛ったレトロな店内に「醤油味のフランス語」（？）の花が咲きました。三輪山の麓を巡り、山や草木そのものは言葉を語らなくても、古い社と神水で醸された地酒を通して、いにしえとの時間をこえた交感ができた一日でした。 （大内隆一）

◆◆◆J’ai eu la chance, il y a un peu plus d’un mois, de participer à la sortie au sanctuaire d’Ômiwa-jinja de l’association franco-japonaise de Nara. Nous avons pu, tout en discutant agréablement, découvrir ce merveilleux sanctuaire à l’histoire millénaire. Saviez-vous que les boules de cèdres que l’on trouve à l’entrée des izakayas et autres marchands d’alcool proviennent, au moins historiquement, de ce sanctuaire ? J’étais surprise de le découvrir – comme quoi Nara est à la source de bien des coutumes japonaises ! Nous avons également pu déguster une eau très pure, proche de l’entrée du mont Miwa, avant de nous diriger vers la deuxième partie de la visite, la dégustation de saké local – absolument délicieux, il faut le dire. En bref, quelle belle journée ! 一ヶ月ほど前、奈良日仏協会の大神神社散策行事に参加する機会があり、楽しくお喋りしながら、千年の歴史を持つこの素晴らしい神社について知ることができました。居酒屋や酒屋の入口にある杉玉が歴史的にこの神社に由来することを、みなさんはご存知でしたか？ 私には驚きでした。やはり奈良は日本の様々な慣習の源泉なのですね！ 三輪山の入口近くで澄んだ清水を味わった後、散策後半のこの土地の酒の賞味へと向かいました。凄く美味しかった、と言わないわけにはいきません。なんとも楽しい一日でした！ (Jeanne AUSTRY)

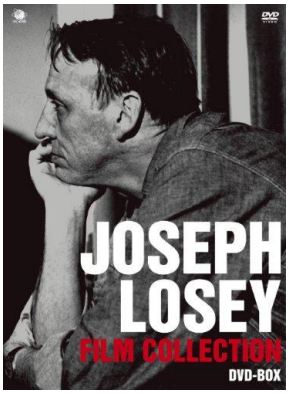
◆◆◆Cette année encore, nous avons pu passer un très bon après-midi dans le cadre du « Club de guides » de l’AFJN. Nous avons commencé par une visite très intéressante du sanctuaire Ômiwa-jinja où nous avons eu la chance de pouvoir écouter les explications d’un desservant. Ce sanctuaire abritant par ailleurs la divinité tutélaire des brasseurs de saké, nous avons très logiquement enchaîné avec la visite d’une brasserie (avec dégustation !) qui a constitué une excellente transition avant le dîner décontracté qui clôturait cet après-midi. Dîner où – l’alcool aidant sans doute une peu – tout le monde semblait parler beaucoup plus aisément le français... Merci à tous pour votre participation !

今年も日仏協会の「ガイドクラブ」の行事で楽しい午後を過ごすことができました。はじめに大神神社を訪れ興味深い宮司さんのお話を聞きました。醸造業者の神様を祀る神社参拝の後は、おのずと酒造所へと至り（利き酒も！）、気のおけない夕食の前の最高のつなぎとなりました。一日を締めくくる夕食会では、少しアルコールの助けもあってか、みんないつもより簡単にフランス語を話しているようでした。参加者のみなさん、どうもありがとう！ (Pierre RÉGNIER)

第 45 回日仏シネクラブ例会（11/26）報告

◆◆◆シネクラブ例会に初めて参加しました。今回の作品はＪ．ロージー監督の『パリの灯は遠く』(*Monsieur Klein*, 1976)。舞台は第二次大戦中、ドイツ占領下のパリ。アラン・ドロン扮する主人公は、同姓同名の謎の人物が仕組んだ罠によって、ユダヤ人であるという身に覚えのない疑いをかけられます。彼は疑いを晴らすため、自分を陥れた男を自らの分身であるかのように執拗に追い始めます。映画はカフカの『審判』にも似た不条理劇の様相を呈し、見終えた後の私は、つるつると滑り、よじ登ることのできない壁に閉ざされた部屋に迷い込んだかのように、語る言葉を失い、呆然としていました。

しかし、シネクラブ恒例の意見交換会で、皆さんの活発な発言を聞いているうちに、霧の中を彷徨するようなカフカの世界から、元の（しかし、少しだけ新しくなった）世界に戻って来ることができました。映画の仕掛けやショットの持っている意味が見えてきただけでなく、私には見えていなかった映像、全く異なる見方があったことにも気がつきました。≪一人では得られない経験≫が、シネクラブには溢れていました。



最後に映画の感想を一つ。それは無名性の怖さです。同姓同名のユダヤ人を追いかけていた主人公は、映画のラストで収容所行の列車に収監されてしまいます。ユダヤ人ではないのに、です。あたかも、ユダヤ人がいるのではない、“彼はユダヤ人だ！”と誰かが叫べば、人はユダヤ人になるのだ、という恐ろしい現実を象徴しているかのように思えました。また、主人公を友人として支えてきた弁護士は、主人公の国外逃亡を助けながらも、彼の家を自分の物にしてしまいます。善良だったはずの一般市民が時代に流されて悪に加担してしまう。無名の多数が悪とも意識しないまま悪に加担する恐ろしさ。私は本当に怖い映画を見てしまったのかもしれません。（寒河江康夫）

◆◆◆映画の原題でもある Monsieur Klein は、影の自分を追いつづける男。全編ロベール・クラインがロベール・クラインを追う展開です。ナチス・ドイツの占領下、いつの間にか自分がユダヤ人として、警察にある名簿に登録されていることを知った主人公。その名簿にはもう一人のロベール・クラインがあることも分かります。彼は動揺します。彼の心には一つの負い目があるのです。それは彼が、美術品を換金しにくる多くのユダヤ人の足元をみてあくどい商売をしていることです。「これはきっと復讐だ、ワナに違いない」と言う彼、「でもその理由は？」と愛人に問われて返答ができません。ユダヤ人一斉検束の危機が迫る中、出生証明書の入手は間に合いそうになく、彼は真実を明らかにするため、もう一人のロベール・クラインを探し出すのに全力をあげますが、相手は巧妙に姿を隠しています。ただおぼろげに現れてきたのは一人のレジスタンスの姿でした。しかし遂に彼は友人の忠告を受け入れ、財産を処分し、出国するため偽の旅券を手に、マルセイユ行きの列車に乗り込みます。列車が動き出し観客はすこしほっとするのですが、そこで主人公は突然予想外の行動に出て、映画は最後のクライマックスに向かいます。「私の問題だ、私が解決する」。その時、彼が友人に言った言葉です。（山本恭介）

第 46 回奈良日仏協会シネクラブ例会（2/25）の案内

★2018 年 2 月 25 日（日）13:30～17:00　★奈良市西部公民館 5 階第 4 講座室（予定）
★プログラム：『仁義』(*Le Cercle rouge*, 1970 年, 140 分）★監督：ジャン＝ピエール・メルヴィル Jean-Pierre Merville
★参加費：会員無料、一般 300 円　★飲み会：例会終了後「味楽座」にて　★問合わせ：Nasai206@gmail.com（予約不要）
★『パリの灯は遠く』の例会では参加者のみなさんが次から次と発言、「シネクラブ」の醍醐味を味わうことができました。自分でも自分の行動を説明できないような複雑な人間存在を体現する人物をアラン・ドロンが演じたことで、観る者はいっそう引きこまれたように思います。2 月の例会では、そんな俳優アラン・ドロンの底知れない潜在能力を引き出している監督ジャン=ピエール・メルヴィルの作品をとりあげます。メルヴィルは今年ちょうど生誕 100 周年、フランスでも日本でも特集上映会が開催されましたが（関西では今月 23～26 日シネヌーヴォにて）、彼の作品にみなぎる独特の緊張感・画面構成・凝縮された台詞、人間たちの心の闇と愛に肉迫するドラマの演出等々、その魅力を語りだせばきりがありません。アラン・ドロンは『サムライ』『仁義』『リスボン特急』の三作に出演していますが、メルヴィルの美学を確実に理解して演じる彼の俳優魂に敬服します。スター俳優であるにもかかわらず、『仁義』ではブールヴィル、イヴ・モンタン、ヴォロンテらの共演者たちの他の映画では見られないようなたたずまいをいっそう映えさせているのも、ドロンの隠れた魅力かなと思います。『仁義』はフランスで 433 万人以上の大ヒットを記録し、商業的にも芸術的にも成功をおさめたまぎれもない傑作です。（浅井）

アラン・ドロン

ブールヴィル

ジャン・マリア・ヴォロンテ

イヴ・モンタン

ジャン＝ピエール・メルヴィル

フランス各地方の伝統菓子（５）故郷をこよなく愛するバスクの人々

スペインとの国境にまたがるバスク地方（ペイ・バスク）にはあちこちにバスク語の表示が見られるように地方文化が色濃く残っています。

お菓子としては兵士のベレー帽に似せてチョコレートをまぶした『ベレ・バスク』、キリスト教以前から残る卍のような文様（ロブリュー）を描いたアーモンド生地で現地イッサスーの黒チェリーのジャムを挟んだ伝統的な『ガトー・バスク』、そして忘れてはならないチョコレート。チョコレートはバスク地方経由でフランスに伝わり、現地のチョコレート博物館ではその歴史を展示しています。

ガトー・バスク博物館でのこと。シェフがデモンストレーションをしながら途中で「バスクの州は七つある」と説明し、最後に「バスクはいくつある？」と尋ねました。「七つ！」と誰かが答えました。すると、シェフはいたずらっぽく笑って言いました。「いや、バスクはひとつ」。バスク人の強い絆を表してみせたのです。（柳谷安以子）

フランスの郷土料理（２）オーヴェルニュ地方の「プティサレ」

今回は私にとって最も思い出深い、フランス中央部オーヴェルニュ地方の郷土料理をご紹介させていただきます。クレルモン＝フェランを中心とするこの地方にも数々の美味しい郷土料理が存在します。例えば、チーズをたっぷり練り込んだマッシュポテト「アリゴ」(aligot) や、じゃがいもとチーズとベーコンをカリッとひとまとめに焼き上げる「トリュファード」(truffade) が有名ですが、ル・ピュイ産のレンズ豆 (AOC 認定) を使った料理も外せません。このレンズ豆を生かした料理「プティサレとレンズ豆の煮込み」(petit salé aux lentilles)を紹介します。

まず、プティサレ（豚肉の塩漬け）を作ります。豚バラ肉のブロック、重量の２％の塩と１％の砂糖をしっかりすりこんでビニール袋に入れ、冷蔵庫で最低３日間寝かせます。次に必要であれば冷水で塩抜きします。よく水気を拭って、肉の表面に焼き色をこんがりとつけます。香味野菜と一緒に水で柔らかくなるまで煮込みます。肉を引き上げた美味しいスープで、レンズ豆を柔らかく煮込みます。

大きなお皿にドッカリ大胆に盛り付けたら完成です。お好みでマスタードを添えて、黒胡椒をパラリ。よく冷やした白ワインとバゲットと一緒にボナペティ！　もう言葉を失う美味しさです。皆様も是非チャレンジしてみて下さいね！

それでは皆さま Bonne année！　次回もお楽しみに。　（法人会員 北田浩久）

会員投稿　詩と音楽のマリアージュ

坂本 成彦（さかもと しげひこ、前会長）

11 月 23 日（祝・木）、藤村久美子理事が主宰する榛原のホワイエ・ヴェールにて、「詩と音楽のマリアージュ」と題するコンサートが行われた。「マリアージュ」とはフランス語で「結婚」という意味、最近はおしゃれな使い方で「結びつき」とか「融合」とかの意に使われることもある。申し込み受付後、瞬く間に定員締め切りとなり 70 名満席の盛況。奈良日仏協会の後援行事ということで、出演者も含め会員・家族 14 名が参加。藤村さんの人脈の広さに敬服。

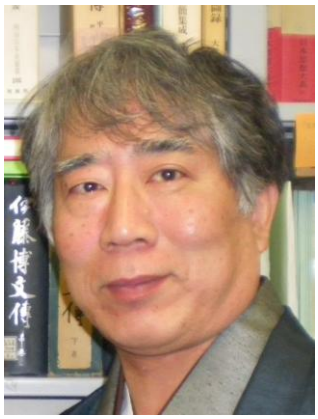
ドビュッシー「亜麻色の髪の乙女」の藤村さんの流れるようなピアノ演奏からはじまった。続いてボードレール、ヴェルレーヌの詩についての三野会長による解説。内輪話も加えながらのお話は、フランス文学に疎い私も引き込まれた。それらの詩に、デュパルク、フォーレ、ドビュッシーらが曲付けした歌曲を、今年 7 月に奈良日仏協会に入会されたばかりの水谷雅男さんが歌ってくださった。水谷さんは、Mon Nara 9-10 月号で紹介されているように、現役のバリトン歌手であり、かつては大学でも歌曲を教えておられた。フランス語の素晴らしい歌声に会場はうっとり…。

今年はホワイエ・ヴェール創立 25 周年。ならば「銀婚式」。「マリアージュ」のテーマともマッチして、記念すべきコンサートとなった。アンコールは、このコンサートホールの名前の原点になったレイナルド・アーン（曲）、ヴィクトル・ユーゴー（詩）の「もし私の詩に翼あれば Si mes vers avaient des ailes」で閉められた。コンサートのあとは、有志のパーティーで和気あいあいの大盛り上がりで幕を閉じた。

会員紹介

19 世紀の日本とフランス

青山 忠正（あおやま ただまさ）



妻の登美子と共に奈良日仏協会の会員になって、数年が経ちますが、私のほうは文字通りのペーパー会員で、会合などには残念ながら、ほとんど参加できません。京都の佛教大学で、現役の歴史学部歴史学科の教授を勤めているため、まず時間の余裕がないせいです。念のため、申し添えておけば、私自身は、仏教とは縁がなく、ただの俗人です。

私の専門は 19 世紀の日本史で、いわゆる明治維新の時期にあたります。たまたま、最近の数年が、その当時から数えて 150 年にあたるため、新聞・雑誌をはじめとするマスメディアの世界では、2017 年は「大政奉還 150 周年」、2018 年は「明治 150 年」という調子で、特集などを組むことが多く、いきおい、それに付き合う機会が増えました。また、各地方自治体はじめ、地域レベルでも、何かの 150 年をテーマにフォーラムなどを開催し、それを地域の振興に結び付けようとする機運が盛んです。

たとえば、7 月には兵庫県の生野で、コワニェ来日 150 年の記念フォーラムがあり、これにちなんだ基調講演をしてきました。あまり知られていないようですが、ジャン=フランソワ・コワニェ（Jean-François Coignet,1837－1902）は、フランス人の鉱山技師で、薩摩藩に招かれて 1867 年に来日しました。新政府の成立後は、明治元年（1868）9 月から、政府御雇い外人の第 1 号として、それまで徳川幕府直轄で、事業不振に陥っていた生野銀山の立て直しに取り組みました。コワニェと、彼をリーダーとする約 20 人のフランス人技術者のチームは、その後 10 年間にわたり、鉱石の採掘や精錬技術の伝習はもとより、製品を鉱山から飾磨港まで輸送するための馬車道を建設するなど、地域産業の発展に大いに貢献しました。

以上は、ほんの一例にすぎませんが、フランスに限らず、欧米諸国からの技術や文化の導入は、19 世紀日本にとって、近代化の大きな推進力でした。そうした事実を、多くの方に知っていただくのも、歴史家としての務めの一つだろうと考えています。

非日常的な楽しみ

米津　春日（よねづ はるび）

1999 年 12 月末、ミレニアムを洋上で迎えようと、私ども夫婦にとって初めてのクルージングが始まりました。12 月 31 日はニューイヤーズ・イヴ。船上レストランのシェフが、腕によりをかけて用意したガラディナーです。そのあとは年越しを祝って、カウントダウン・パーティーが始まりました。船の中央のラウンジに乗客が集まり、飲んで、踊って、12 時少し前から、カウントダウンが始まり、ジャスト 12 時になると、沢山の風船がいっせい舞い降り、シャンパンを満たしたグラスを手に、みんな口々に「明けましてお目出度う！ハッピー・ニューイヤー！」を口にし、夜が明けるまで祝いました。

2000 年元旦はあいにく雲が多く、初日の出は見ることが出来ませんでしたが、除夜の鐘を聞いて年越しそばで過ごす大晦日とは違った感激でした。

女性にとって旅行の楽しみは、家事から解放されることです。食事も三度の献立を考えず、座れば目の前にご馳走が並びます。お風呂に入って、浴衣に着替え、くつろいだ姿で食事をする、と言うわけにはゆきませんが、髪型を調え、衣装を選び、思いっきりお洒落をして食事を楽しむ、という喜びがあります。フォーマルナイトでは、男性もディナーコートに身を包み、結構お洒落が楽しめます。

さて、その日は写真屋さんのかき入れどきでもあります。撮影用の特設コーナーが設けられ、レストランにもスナップを撮りに出張してきます。撮った写真は専用コーナーに、日付け・撮影場所ごとに展示されます。自分たちの写真を見つけると、つい買ってしまいます。

こうしてクルージングにのめり込み、今では殆ど毎月の様にどこかの船に乗っている次第です。

2018 年度 総会および懇親会の開催（予告）

奈良日仏協会の 2018 年度総会を以下のとおり開催する予定です。
✤日時:2018 年 2 月 11 日（日・祝）14:00 より約 1 時間　✤会場:「菜宴」（奈良市小西町 19　マリアテラスビル 2F）
✤総会終了後のミニコンサートでは、会員の坂本利文・洋子ご夫妻による音楽演奏を予定しています。続いて懇親会となります。　✤1月下旬にあらためてご案内しますが、ご予定の程よろしくお願い致します。　（事務局）

奈良日仏協会主催フランス語講座開講（予定）

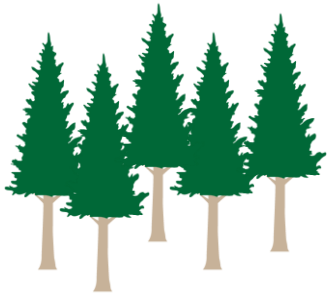
◆現在、奈良日仏協会の「広報」活動の一環として、当協会の会員主催によるフランス語・フランス文化講座の「講座表」を Mon Nara 誌に同封（年 1 度 Mon Nara 本体に掲載）し、会員の皆様にお届けしておりますが、各講座の運営はすべて個々の会員の責任においてなされております。来年度もこれまで同様、当協会としては「広報」協力を続けてまいります。
◆来年の 4 月以降、上記の会員主催講座とは別に、奈良日仏協会が主催・運営するフランス語講座を開講できるように、現在準備を進めております。今のところ開講が予定されているのは、以下の二つの講座です。
1）入門・初級フランス語講座　（対象:フランス語がまったく初めての方、少し学んだことはあるがもう一度はじめから学びたい方）
2）フランス語会話講座　（対象:フランス語初中級～上級者で、フランス人との「会話」の実践を希望される方）
　いずれの講座も会場は生駒駅か学園前駅近くを予定しておりますが、日時等の詳細はまだ決まっておりません。
会員の皆様でこれらの講座に関心のある方は、ご都合を講座開催日時等を決める際の参考にさせて頂きますので、事務局までご連絡お願い致します。（mail:nara.afj@gmail.com　tel:090-8538-2300）

≪2017 年度第 5 回理事会報告≫　…事務局

日時：2017 年 11 月 16 日（木）15:00～17:30
場所：放送大学奈良学習センターZ308 号室
出席者：三野、野島、浅井、井田、髙松、杉谷
議題 1. 2017 年度暫定会員 93 名。会費未納者に督促状。
議題 2. 前回理事会 (9/21) 後の活動：(9/23) 秋の教養講座「モリエールとその時代」放送大学との共催で今後も継続、2018 年は 11/23（金・祝）が候補。(10/14) ガイドクラブ散策「大神神社と利き酒体験」次年度は勉強会をガイドクラブから分離することを検討。
議題 3. 今後の行事：(11/26) 第 45 回日仏シネクラブ例会アラン・ドロン特集『パリの灯は遠く』。(12/7) フランス・アラカルト特別篇「ワインパーティ」進捗報告、分担確認。（2/11）来年度「総会・懇親会」案内発送スケジュール確認。
議題 4. Mon Nara：来年の発行は編集部で運営、発行回数は要検討。議題 5. その他：協会主催講座の検討、来年 1 月理事会で受講料、講師謝礼、回数等決定し予算化。来年の「フランス・アラカルト」講師案、1 月は休止、3 月講師は薮下哲司氏（宝塚歌劇評論家）。美術鑑賞会など文化講座の検討、来年度美術鑑賞講座を予算化。新理事メンバーについて。平成 29 年決算について、1 月 10 日以降事務局と会計担当者の会合開催。次回理事会：1 月 18 日（木）15:00~16:30「菜宴」にて。

会員通信 ✉ ✉ ✉ ✉

★2017 年 10 月 24 日、杉谷事務局長立ち合いのもと、三野会長への朝日新聞の取材があり、「フランスの奥深さ味わって」（Mon Nara を手にした会長の写真入り）というタイトルの人物紹介記事が、11 月 1 日の奈良版に掲載されました。
★ 新しい年が、会員のみなさまにとって良い年でありますように！
Joyeux Noël et Bonne Année 2018 !



編 集 後 記　☆紅葉後、葉を落とした樹木の幹や枝が空に描く様々な線模様がきれいに見られるのは、冬の楽しみのひとつです。そんな落葉樹とは対照的に、真冬でも青々とした緑の葉を繁らせている常緑樹「スギ」(cryptomeria japonica) には格別の存在感があります。☆樹齢 2000 年以上ともいわれる屋久杉に象徴されるように、古来より日本各地に自生していました。☆弥生時代の登呂遺跡はスギが水田の畔板や建築材料に用いられていたことを証し、日本の文化の基層を育んできた木といえましょう。☆わが奈良県の「吉野杉」は日本三大杉の一つ。日本で最初に人口植林され、江戸時代にはすでに林業が本格化しています。吉野のスギは酒樽に用いられ、桜井市の大神神社所縁の清酒「三諸杉」だけでなく、神戸の灘や京都の伏見の酒造産業の発展にも貢献したようです。☆吉野川源流の川上村を訪れると、スギの美林の見事さに思わず目をみはらされます。一本一本が生き生きとして、土地の人が代々手間をかけて大切に育ててきたことが伝わってきます。冬にみずみずしい生命力をたたえるスギ。樹木は「水と大地と空をつなぐ架け橋」という表現が、ここでは自然に感じられます。　(N. Asai)

◆当協会では会員を募集しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、ホットなフランス情報などを歓迎します。誌面の都合で意味を極力変えずに表現を変えさせていただくことがあります。次号は 1 月 31 日が原稿締切日です。

Mon Nara　Nov－Dec　2017 11－12 月合併号　numéro284
奈良日仏協会　Association Franco-Japonaise de Nara
HP：http://www.afjn.jp　E-mail：nara.afj@gmail.com　FAX：0742-62-1741
〒630-8226 奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴［郵便物のみ］発行責任者：三野博司